

来なさい。そうすれば分かります。

ヨハネの福音書 1章 35-42節

はじめに

月の第一週の説教は、「ヨハネの福音書」からお話することになっています。今日の聖書箇所には、イエス様の弟子たちが、どのようにイエス様と出会ったのかという出来事が書かれています。

1. ヨハネの証し

まず 35-37 節を見てみましょう。「**その翌日、ヨハネは再び二人の弟子とともに立っていた。そしてイエスが歩いて行かれるのを見て、『見よ、神の子羊』と言った。二人の弟子は、彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った。**」

ここには、バプテスマのヨハネの弟子であった二人が、ヨハネの証しを聞いて、イエス様について行くようになったということが書かれています。バプテスマのヨハネの使命は、イエス様を証しすることでした。決して、自分の弟子を多く作ることはありませんでした。ですから、自分の弟子たちにも喜んでイエス様を証しし、「あの方こそ、神の子羊」だと、自分の弟子たちをイエス様のもとへと導こうとしたのです。ヨハネは 3:30 で、「**あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません**」と言います。ヨハネは、自分が盛んになることを求めるのではなく、ひたすらイエス様が盛んになることを求めたのです。自分のことよりも、イエス様のことを考える、それがバプテスマのヨハネでした。

バプテスマのヨハネには、二人の弟子がいました。その弟子のひとり、40 節にあるように、「**シモン・ペテロの兄弟アンデレ**」でした。彼は、イエス様の弟子になる前は、バプテスマのヨハネの弟子であったようです。では、もうひとは誰なのでしょう。伝統的には、この「ヨハネの福音書」を書いた「**ゼベダイの子ヨハネ**」ではないかと言われています。ペテロの兄弟アンデレも、この「ヨハネの福音書」を書いたゼベダイの子ヨハネも、もともとはバプテスマのヨハネの弟子であって、バプテスマのヨハネからイエス様の証しを聞いて、イエス様の弟子となったと言えます。

バプテスマのヨハネは、二人の弟子たちに、イエス様について「見よ、神の子羊」と証ししました。ヨハネは 29 節でも、イエス様のことを「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」と言いました。ヨハネは、イエス様こそ、私たちの罪を取り除くために、犠牲となる神の子であると証したのです。それを聞いて、アンデレとゼベダイの子ヨハネは、イエス様は本当に「世の罪を取り除く神の子羊」なのかどうかを確かめるために、イエス様について行ったのです。

2. 来なさい。そうすれば分かります

38-39 節には、イエス様とイエス様について行った二人の会話が書かれています。「**イエスは振り向いて、彼らがついて来るのを見て言われた。『あなたがたは何を求めているのですか。』**彼らは言った。『ラビ(訳すと、先生)、どこにお泊りですか。』**イエスは彼らに言われた。『来なさい。そうすれば分かります。』**そこで、彼らがついて行って、**イエスが泊っておられるところを見た。そしてその日、イエスのもとにとどまった。時はおよそ第十の時であった。**」

イエス様は、黙ってイエス様について来る二人に向かって、「あなたがたは何を求めているのですか」と言われます。すると二人は、「ラビ(訳すと、先生)、どこにお泊りですか」と答えます。イエス様は二人に、「何を求めているのか」「なぜついて来るのか」と聞いているのに、二人は「どこにお泊りですか」と宿泊先を聞いているように見えます。確かに二人は、イエス様とじっくり話したかったので、宿泊先を聞いたのかもしれませんが。「時はおよそ第十の時であった」、つまり「午後4時頃」だったので、もう間もなく暗くなる、外で立ち話もできないので、宿泊先でゆっくり話しましょうという意味を込めて、「どこにお泊りですか」と聞いたのかもしれませんが。

しかし、この「泊まる」という言葉は、「とどまる」という意味であって、「ヨハネの福音書」に多く出てくる特徴的な言葉なのです。例えば、15:5にはこうあります。「**わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです**」。この「とどまる」という言葉が、今日の聖書箇所「泊まる」と同じ言葉なのです。ですから、この15:5は、「人がイエス様の家に泊まり、イエス様もその人の家に泊まるなら、その人は多くの実を結ぶ」という意味でもあるのです。イエス様と一緒に泊まれば、多くの実を結ぶ人になれると言うのです。

イエス様と一緒に泊まる人で思い起こすのは、取税人のザアカイです。ザアカイは、取税人のかしらで、人々から脅し取って金持ちになった人でした。人々からは「罪人」と呼ばれていました。そのような彼に、イエス様は話しかけ、「**わたしは今日、あなたの家に泊まることにしている**」(ルカ 19:5)と言われたのです。ザアカイは喜んでイエス様を、自分の家に迎え入れたのです。するとザアカイは、「**主よ、ご覧ください。私は財産の半分を貧しい人たちに施します。だれかから脅し取った物があれば、四倍にして返します**」(ルカ 19:8)と言い出したのです。ザアカイは、イエス様を家に泊めたことによって、自分の罪を悔い改めて、全く人生が変わってしまったのです。イエス様も、「**今日、救いがこの家に来ました**」(ルカ 19:9)と言われました。イエス様を家に泊めると、つまりイエス様と寝食を共にして、一日中過ごす、悔い改めと救いが起こり、実を結ぶ人生へと変えられていくのです。

イエス様に「とどまる」ということは、イエス様と一日中一緒にいるということです。つまり寝食を共にすること、イエス様と一緒に生きるということです。そうすれば、私たちの人生は変わり、私たちの人生は実を結ぶ人生、花開く人生となっていくのです。

アンデレとゼバダイの子ヨハネは、39節に「その日、イエスのもとにとどまった」とあるように、イエス様と共に泊まったのです。寝食を共にし、夜通し語り合い、一緒に時間を過ごしたのです。すると彼らに何が起きたのでしょうか。41節を見ると、アンデレは「**私たちはメシア(訳すと、キリスト)に会った**」と言ったとあります。彼らは38節では、イエス様のことを「ラビ」と呼んでいました。彼らはまだイエス様のことを、律法の先生、教師としか思っていませんでした。しかし、イエス様と一緒に時間を過ごす中で、イエス様が単なる「ラビ」ではなく、「メシア」「キリスト」、つまり「神の子羊」であり「救い主」であることが分かったのです。彼らも、ザアカイと同じように、イエス様と一緒に時間を過ごすことによって、変えられたのです。

人は誰でも、イエス様に「とどまる」時に、人生が変えられていくのです。イエス様に「とどまる」とは、イエス様と一緒に時間を過ごすことです。24時間共にいて、寝食を共にして、イエス様と語り合うことです。つまりイエス様と一緒に生きることです。イエス様の御言葉をいつも心に蓄え、いつでもイエス様に祈り、イエス様との交わりに生きることです。そうすれば、私たちはイエス様が誰であるかをはっきりと知るようになり、実を結ぶ人生へと変えられていくのです。

イエス様は、アンデレとゼバダイの子ヨハネに、「来なさい。そうすれば分かります」と言われました。ここで大切なのは、イエス様は、「来たら分かる」と言っておられることです。つまり行動が先で、認識は後だということです。イエス様は決して、「分かってから、来なさい」とは言われませんでした。イエス様は、「来たら分かる」、行動すれば分かる、一歩踏み出せば分かると言われるのです。

古代の神学者であるアウグスティヌスという人は、こう言いました。「認識は信仰の報酬である。それ故、信じるために認識を求めようとするな。むしろ、認識するために信じなさい」。キリスト教というのは、全部分かってから信じるものではありません。信じたら分かるようになるものなのです。イエス様という方は、イエス様を信じて、イエス様と一緒に生きるようになって初めて分かっていく方なのです。イエス様という方を経験して、初めて分かるようになる方なのです。そしてイエス様という方が本当の意味で「分かった」時、私たちの人生は変えられていくのです。

私たちは、全部分かってから、もっと善い人間になってから、信じようと考えます。しかしイエス様は、「来なさい。そうすれば分かります」と言われます。信じれば分かるようになる。信じれば変えられると言われるのです。つまり信じなければ分からない、信じなければ変わらないと言われるのです。私たちは決して順番を間違えてはなりません。信じれば分かるようになり、信じれば変えられるのです。

3. アンデレの証し

さて、40-42節には、イエス様によって変えられたアンデレが、自分の兄弟ペテロをイエス様のもとに連れて行くという出来事が書かれています。「ヨハネから聞いてイエスについて

行った二人のうちの一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、『私たちはメシア(訳すと、キリスト)に会った』と言った。彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンを見つめて言われた、『あなたはヨハネの子シモンです。あなたはケファ(言い換えれば、ペテロ)と呼ばれます。』。

アンデレは、イエス様と共に泊まって、イエス様のことが「メシア」「キリスト」、つまり「神の子羊」「救い主」であると「分かった」のです。その後に彼が「まず」「初めに」行なったことは、兄弟のペテロをイエス様のもとに連れて行くことでした。

アンデレは、バプテスマのヨハネからイエス様のことを聞いて、イエス様について行き、イエス様を「神の子羊」「メシア」だと知るようになりました。そして今後は、自分が兄弟のペテロにイエス様のことを教えて、イエス様のもとに連れて来たのです。バプテスマのヨハネの証しがアンデレをイエス様のもとに導き、アンデレの証しがペテロをイエス様のもとに導いたのです。このように、キリスト教は「証し」によって広まっていったのです。人が人にイエス様を証し、証しされた人がイエス様を経験し、その人がまた誰かに証ししていくという形で広まっていったのです。

これは想像ですが、アンデレもおそらくペテロに、「来なさい。そうすれば分かります」と言って、ペテロをイエス様のもとに連れて来たのではないのでしょうか。アンデレは、ペテロをイエス様のもとに連れて来てから、何かしたのでしょうか。アンデレは何もしていません。ただイエス様がペテロに語りかけ、「あなたはケファ(言い換えれば、ペテロ)と呼ばれます」と言われ、ペテロを弟子として、彼を訓練し、教会の基礎を築く使徒とされたのです。

私たちにできること、それは人々にイエス様を証しして、「来なさい。そうすれば分かります」と言って、人々をイエス様のもとに連れて行くことです。そうすれば、イエス様が人々に語りかけてくださるのです。私たちにできること、それは人々をイエス様のもとに連れて行くこと、その後のことはイエス様にお任せすればよいのです。

アンデレがイエス様に会った後に、「まず」行なったことは、自分の兄弟、つまり自分の家族にイエス様を証しすることでした。「まず自分の兄弟シモンを見つけて」とあります。私たちが「まず」イエス様を証ししなければならないのは、自分の家族ではないのでしょうか。私たちは、「まず」自分の家族をイエス様のもとに連れて来なければなりません。

家族をイエス様のもとに連れて行くこと、それは非常に難しいことでもあります。家族は、自分の私生活もすべて知っている存在ですし、家族だからこそ揉め事は起こしたくなくとも思います。ですからある意味で、一番証ししにくい、伝道しにくい、また教会に誘いにくい存在かもしれません。しかし諦めずに、祈りつつ、ふさわしい時を待ちたいと思うのです。聖書には、「**主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます**」(使徒 16:31)とあります。人は必ず、イエス様を経験すれば変えられるのです。イエス様を信じて、イエス様のことが本当の意味で分かれば、必ず変えられるのです。イエス様の「来なさい。そうすれば分かります」という言葉を信じて、私たちもイエス様を証ししていきましょう。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたが遣わされたイエス様は、人の証しによって、人から人へと伝えられていき、全世界へと広められました。イエス様は、「来なさい。そすれば分かります」と言われます。あなたは、信仰がなければ分からない方です。あなたと交わり、あなたと一緒に生きていかなければ分からない方です。どうか私たちが、その場に立ち止まらないで、一歩踏み出して、信仰によってあなたを経験し、知っていくことができますように。

また私たちも、バプテスマのヨハネやアンデレのように、あなたを証しすることができますように。「まず」は家族をあなたのもとに連れて行くことを祈らせてください。私たちの家族にも、イエス様あなたが語りかけてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。